

この旭川の雪景色の中にたたく生まれ変わりつつある別院本堂等には、限りない繋がりと言葉では言い表せない感動が、形となって私自身に訴えかけて来ます。

来年に控えております旭川別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要には一人でも多くの御門徒と共に勤めさせて頂ける事を心より念じております。

真宗大谷派（東本願寺）大谷暢顯門首御親修  
旭川別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要  
記念事業本堂等改修工事完成奉告式  
期日 2014（平成26）年6月19日～22日

## お願い



この度の旭川別院本堂等改修工事にあたり、記帳書提出していただき感謝申し上げます。

ご門徒全員が一丸となって本堂等改修を目指していきたいと考えておりますので、未だ記帳書の提出が滞っております方々には是非ともお願い申し上げます。

※ 最終回だから…、調査員からの一言で閉めます。

草部……わがままに始まりワガママにおわります。読んでいただいた方、ご協力いた

だいた方、見守って下さった方、付き合ってくれたみんな、ありがとうございます。

垣原……職人の心意気・門徒の願いは別院への愛でした。

横井よ …皆様、長期に渡りご愛読下さり、心より感謝申し上げます。

長尾……沢山の人達のご協力ありがとうございました。

高橋……素敵な出逢いがありました。ありがとうございました。

# 別院しらべ隊

調査報告書No.28 僕たちは歩みを止めません

最終回（^^;）

平成22年1月から宗祖親鸞聖人750回御遠忌記念事業として始めました本堂等改修工事をご縁としてスタートし、約3年に渡り調査を進めて来ました『別院しらべ隊』も今回で28回目の調査報告をもちまして、別院しらべ隊調査終了、並びに解散のお知らせをさせていただきます。

ご門徒の皆様からは、「毎回楽しみに待ってるからね」と声を掛けて頂いて、「昔はこうだったんだよ」と様々な事を教えて頂きました。皆様の情報をもとに、独自の調査ではありましたが、ご報告させて頂く事も有ったり無かったり…

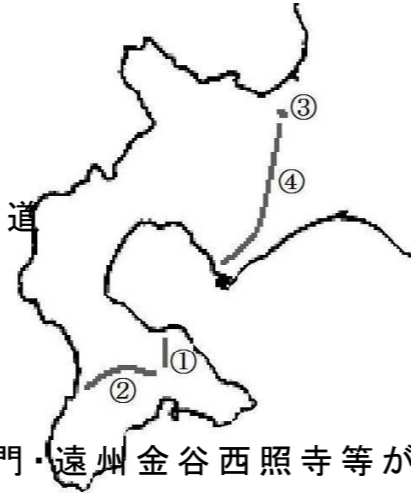
旭川別院本堂を建立された花輪喜久藏氏の技を引き継いでおられる気仙大工の坂本棟梁から直接お話しを頂いたり、作業現場の方々から進捗状況を教えていただいたり、旭川別院第二代輪番の子孫・浅野俊道氏（樹教寺）にお話しを伺ったりと、思い返せば旭川別院に携わって頂いている方々には大変お世話になりました。

御愛読下さった皆さまには心より感謝申し上げます。

# 東本願寺による新道切開

明治3年、現如上人が北海道へ渡った一番の目的は新道を切開くことである。東本願寺が携わった道路は下記の4本ある。

- ① <sup>いくさがわ</sup>軍川より砂原に至る4里半(約18km)の新道
- ② 江差街道大改修
- ③ 山鼻より西方発垂別に至る1里半(約6km)の新道
- ④ 札幌平岸より伊達村に至る26里10町(約103km)の新道



## 【1】軍川より砂原に至る4里半(約18km)の新道

駒ヶ岳の半腹を通ずるもので、家老宇野三右衛門・遠州金谷西照寺等が命ぜられた。明治3年7月10日函館出発、11日昼軍川に到着。昼でも暗い樹海に踏入り、夜になると数頭の狼に襲われ、鉄砲を放ちながら、ようやく砂原に到着。

7月12日砂原から新道切り開きに掛かったが、狼に備えて鉄砲を離さず仕事をした。7月20日に竣工。切り開いた要所には「東本願寺切開新道」の標柱を立てた。総工費1600両。



## 【2】江差街道大改修

渡島大野村より毛無峠を越えて鶉村に至る11里の大改修を行った。道路だけではなく、橋の架け替えも行っており、完成までに5ヶ月を要した。経費は3800両であった。

江差街道は、現在国道227号線(大野国道)となっている。

## 【3】山鼻より西方発垂別に至る1里半(約6km)の新道

東本願寺直営で切り開いた。



## 【4】札幌平岸より伊達村尾去別<sup>おさるべつ</sup>に至る26里10町(約103km)の新道

北海道の入口である函館と中心都市札幌とを直結する最重要幹線道路と

して計測されたものである。文化年度(1804~1818年)に近藤重蔵が始めて踏破し、安政年度(1854~1860年)に松浦武四郎が再踏して、重要性を充分認めながら経費と人夫が無く着手に至らなかった。

明治2年9月、東本願寺から家老松井逝水が北海道に調査派遣された時、松浦武四郎からこのルートを教えてもらっていたので、未だ実現していない難工事を完遂しようと決意に至った。新道は、尾去別から長流川に沿って上り、洞爺湖の東側を迂回して定山溪に出て、今度は豊平川に沿うように下り札幌平岸にいたるもので、全長約103km・幅9尺・橋梁架けること103カ所・谷間に板敷をなすこと17カ所の大工事であった。

この工事は、宇野三右衛門道隆、尾崎半左衛門信盛が総指揮者となり、三河の大浜和助を測量方、村上義有を会計方とした。

当時最も困難だったのが人夫の募集であった。賃金を奮発して支払うと言っても募集に応ずる人夫はいなかった。しかし、幸いにも、明治3年に仙台藩の支藩である陸前亘理藩主伊達藤五郎邦成が自ら家臣男女200余名を引率し北海道胆振国有珠郡に移住し、士族移住者の中から男50名が東本願寺新道切開に従事。さらに、根室隣接の和田村に来住した移民も、不作によって生活に困窮していたため東本願寺新道切開に喜んで従事してくれた。胆振地方に居住していたアイヌの人々にも協力してもらった。現如上人に随行して来た人達もモッコを背負って土砂を運び、斧を執って木を切った。

延人員55000余人、所要経費18057両余、明治4年7月工事は完成した。この道路は、「本願寺道路(有珠新道)」と言われるようになった。

